

スカーフを着用しないこと

——イギリスの若者女性ムスリムの社会適応資源としての<知識>——

○Institute of Education, University of London 安達智史

過去 30 年の間、ヨーロッパにおいて、公的場面におけるムスリム女性のスカーフ／ヴェールの着用をめぐる、数多くの議論がおこなわれてきた。その中で、宗教的スカーフは、多くの場合、女性の抑圧のシンボルとして表象されてきた。それに対して、近年、女性ムスリム自身により、スカーフ着用の積極的な意味が語られるようになってきている。たとえば、スカーフの着用は、女性の身体を性的対象にする男性からの眼差しやその商業的利用から自由にさせ、人として他者から尊敬を受けまた自信を持つことを可能にすること。あるいは、スカーフは男性ではなく神への服従を表し、逆に家父長的支配から女性を保護する働きを有していること、などである。だが、一連の議論において、相対的に言及がなされていないテーマが存在している。それは「スカーフを着用しないこと」である。ムスリム女性は、自身を含め、スカーフを着用しないことに対してどのような評価をおこなっているのか。この点は、イスラームと市民社会との関係を考える上で重要な論点である。健全で、多元的な市民社会の一員としての資質には、外部集団の多様性に対する寛大さのみならず、内集団の多様性への承認をも含むからである。そこで本報告では、イギリスにおける女性若者ムスリムへの調査をもとに、スカーフを着用しないことへの態度の分析を通じて、イスラームにおける多様性の尊重のあり方について論じる。本研究は、2009 年および 2012-3 年に、イギリスの中規模都市コベントリー市においておこなった、28 名の若者女性ムスリム（スカーフ／ヴェール着用 18 名、未着用 10 名）へのインタビュー調査をもとにしている。分析の結果は、次の点を示している。スカーフを普段着用していない者も含め、インフォーマントは、一方で、スカーフをイスラームのシンボルとしてとらえ、その着用を義務であると考えている。だが、他方で、スカーフを着用しない女性に対して、総じて寛大な意見を有している。その理由として、スカーフを着用している不品行な女性ムスリム、あるいはスカーフを着用していない品行方正なムスリムと接しており、スカーフ着用がその人物全体を表すものではないと考えていることが挙げられる。加えて、そのような態度は、イスラームの<知識>に基づき正当化されている。たとえば、彼女たちは、「意図 (niyyah)」を重視するイスラームの伝統を念頭に、儀礼（スカーフの着用を含む）よりも、内面において善きムスリムであることをより重視している。また、イスラームの義務が強制ではなく、自由意志によるものであることを強調することにより、自身あるいは他者が「そのとき (=スカーフを着用することを決めるとき)」を待つことの重要性を説いている。これらのことは、「選択」、「テスト」、「準備」といった言葉によって、インフォーマントにより間接的に語られている。彼女たちは、イスラームを避けるのではなく、逆にその<知識>に言及することにより、「スカーフを着用しないこと」に対して寛大な姿勢を保持しているのである。以上の結果は、イスラームは、西欧の主流社会において懸念されているような不寛容や不平等を必ずしも帰結するのではなく、世俗的な啓蒙思想とは異なる方向から、多元的な市民社会に貢献する可能性を有していることを示している。